

# 戦後イギリスのアンビヴァレンス

## — Philip Larkin の '50年代の詩 —

岡 村 眞 紀 子

Philip Larkin は、華々しく人気のある詩人ではなかった。が、1985年、彼が逝ったとき、静かに彼の死を惜しんだものは数少なくはなかったであろう。御輿員三氏もその学術講演の際、「詩集の出るのを楽しみに待つ詩人がいなくなった。」と嘆いておられた。<sup>1)</sup>

Larkin は1922年に Coventry で生まれ、最初の詩作を11才の時、在学していた King Henry VIII School の *The Coventrian* に発表している。早くからの詩への関心にもかかわらず、彼は寡作な、そして寡黙な詩人であった。*XX Poems* を自費出版し(1951)、*The Less Deceived* を Marvell Pr. から出版して(1954)以来、ほぼ10年に1冊のペースで詩作を発表してきた。1950年以降の、イギリスはいうまでもなく、世界は、10年を経る毎にすさまじい勢いで変化していた。その世界の変化のペースの上に静かに乗っかりながら、巻き込まれることなく、詩作を続けていった詩人であったということが言えよう。本稿では、第2次世界大戦中に大学生活を送り、短編小説を書きつつ詩作を始めた戦後間もなくの作品のいくつかに焦点を当ててみようと思う。

1954年7月に書かれた 'Church Going' は、*The Less Deceived* に発表されたもののなかでもよく人に知られたものの一つである。'Church Going' は 'Churchgoing' ではない。Churchgoing (礼拝に行く)ではなく教会に行くことが詩人にとってどんな意味があるのか。このように、この詩はタイトルからして意味が重層的である。この詩の始まりは次のようである。

Once I am sure there's nothing going on  
I step inside, letting the door thud shut.

(ll.1-2)<sup>2)</sup>

普通 churchgoing するとき、人はドアをそっと閉める。ところが、この日、詩人はドシンと音をたててドアを閉める。それは、そこが最早深い信仰心を持つことのできたときの教会ではないからか。人々が集わなくなってドアも錆びついてしまって固かったからか。教会は今 Another church (l.3) となっている。日曜日のためだけにある教会、誰もいない教会の中は教会らしく整ってこぎれいなのかび臭い。が、奇妙に気になる静けさ (silence) だけがある。そこには神が

いるのかいないのか。神までもが絶望し、人が去ってからの歴史をながめていたのか。

Another church: matting, seats, and stone,  
And little books; sprawlings of flowers, cut  
For Sunday, brownish now; some brass and stuff  
Up at the holy end; the small neat organ;  
And a tense, musty, unignorable silence,  
Brewed God knows how long.

(II.3-8)

それでいながら詩人は畏敬の念を持って神に向かうのである。

Hatless, I take off  
My cycle-clips in awkward reverence,  
more forward, run my hand around the font.

(II.8-10)

整えられていながらそれは日曜日のためだけであり、用意された花もまき散らされている。聖なる祭壇には燭台もありながら、今や変色しかけている。漂う静けさはなにか自分に大切な意味を持つようできて濃密なのにかび臭い。このように意味と無意味の間を漂うアンビギュアスな第1連から態度を一つに決めていくように上に引用した詩行が第1、第2の二つの連にまたがって出てくる。この手法は、第3連のはじめで‘Yet stop I did.’ (I.19)と、態度を翻し決断を示して詩行を展開させていく手法と同じものである。

どうしても気にかかる静寂のなか、もう一度教会のなかに、自己と神との関係を確認しようとするが、何故か周りの景色は目新しい。その違いが何なのか自分には分からないが、またしてもそれを知っている人がいる。とはいえ、今度は神ではない。(‘Someone would know,’ (I.12)) 牧師の真似事を、しかも、揶揄的に行い、偽りのお金を献金して、あらためて‘Reflect the place was not worth stopping for.’ (I.17)と、教会を否定する。‘Here endeth’のことばは自分に言い聞かせることばのように聞こえる。ここにとどまる意味はないといいながら、先に述べたように、‘Yet stop I did.’なのである。非常にはっきりと言いきったことばではあるが決して確としたものに裏打ちされているわけではない。

in fact I often do,  
And always end much at a loss like this,  
Wondering what to look for; wondering, too,

戦後イギリスのアンビヴァレンス

When churches fall completely out of use  
What we shall turn them into, if we shall keep  
A few cathedrals chronically on show,  
Their parchment, plate and pyx in locked cases,  
And let the rest rent-free to rain and sheep.

(II.19-26)

この教会だけではない。教会というものは、最早人の心の拠り所ではなく、単に歴史的遺跡としての意味しか持たなくなるときがくるのではないかと恐れている詩人がいる。そんな教会は ‘unlucky places’ であって人には用のないものなのかもしれない。と。一つの結論に向かいつつ、否、とまた思い返す。うんと素朴な人たちにとってはそれでも教会は心の拠り所なのかもしれないのである (II.28-30)。それは信仰というより迷信に近いものであるかもしれない。信仰すらが滅びるのだから、迷信などいつまでも生き続けるわけがない。信仰がなくなるということは無信仰がなくなるということでもあるだろう。

But superstition, like belief, must die,  
And what remains when disbelief has gone?

(II.34-35)

厳然として残る教会の建物にあって、ゆらぎながらも抱いていた畏敬の念 (awkward reverence) は、そこにあるまやかしや、欲望や、素朴さゆえの愚かさを確認するにつれて少しずつ変化し、 ‘the place not worth stopping for’, ‘unlucky place’ を見るようになり、この詩の半ばにして belief どころか disbelief までもがなくなっていく。そこでは認識可能なものはなく、目的までもが見えなくなってくるのである ( ‘A shape less recognisable’ ‘A purpose more obscure’ (II.37-38))。この2行には教会に来ることの目的、信仰の形が自己のなかで解体していく詩人のもどかしさが表れている。 ‘who / Will be the last, the very last, to seek / This place for what it was;’ (II.38-40) の問いに ‘I will be.’ と答えられない詩人の心の疼きがある。信仰によって churchgoing する人たちでないのは確かである。しかし、churchgoing でないにしても church going する人たちの心の中に全く信仰がないということはあるだろうか。最後まで教会に足を運ぶのが自分であるとは言い切れないが、そこに集う crew も ruin-bibber も Christian-addict もまた、みんな自分であるのだ (1.45)。

教会は教会としていつも変わらず厳然としてある。全てあるべきものを備えて。しかしそれらは使われることはない。少なくとも真の意味で使われることはない (1.53)。結婚式と洗礼式と葬式といった儀式のためだけに教会はあるのだ。とはいえ、何故か、この教会にいると心がやすらぐ。

It pleases me to stand in silence here,

(l.54)

この silence にはなんの形容辞も付かず，ひたすら静かな感じがする。そこに佇むと心穏やかになる。教会は ‘A serious house on serious earth’ なのだから。あれほど教会の偽り、まやかしを見据えてきた詩人でありながら，教会こそ，人の抑えがたい諸々の想いを，それと認め，昇華させ，それを運命として受け容れる，この上もなく真摯な場所なのだ，と言いきる。次の引用の55行目の最後の ‘it is’ はいかにも明快な断定である。

A serious house on serious earth it is,  
In whose blent air all our compulsions meet,  
Are recognised, and robed as destinies.

(ll.55-57)

しかもこの教会は決して過去のものとはならない。第1連にあるように musty にはならないのだ。必ず誰かが，常に，この serious な場で，もっと深く serious でありたいという思いに駆られ，多くの過去の人たちとともにここに沈潜するのだから。

And that much never can be obsolete,  
Since someone will forever be surprising  
A hunger in himself to be more serious,  
And gravitating with it to this ground,  
Which, he once heard, was proper to grow wise in,  
If only that so many dead lie round.

(ll.58-63)

この someone のなかには，今の詩人も含まれているのであろう。そして，詩人が so many dead の一人となった後も人は訪れ，もっともっと真摯にならずばすまない心にとらわれ続けていくだろう。

‘Church Going’ は7連からなる詩であるが，その連の構成が実に見事である。1連ごとに詩人の教会への想いは揺れ，そのたびに連の変わり目で，はっと一つの認識に達する。一つの認識からさらに揺れ，また次の認識へと揺れて，最初の silence (l.7) から終わりの silence (l.54) へと帰結してくる。結局同じ所に詩人はいるのだが，silence から silence までの6連の間の教会を ‘this accoutred frowsty barn’ (l.53) とこれまた見事なことばで表現している。 ‘though I’ve

no idea/What this accoutred frowsty barn is worth, / It pleases me to stand in silence here;’ (ll.53-54)の結論のわけが最後の第7連で静かに語られる。まさに *gravitating to the ground* という感じでこの詩は締めくくられるのである。詩人の心の揺れる様はこの詩の登場人物が, I, someone, we, dubious women, the crew etc.と動きながら, 実はそれらの全てが詩人のもう一つの姿であることによっても表される。この詩は Katie Wales が言うように一見 monologue のようでありながら dialogue になっていて, しかも, それがまた internal dialogue であるという意味で monologue なのである。<sup>3)</sup>

ところで, ‘Church Going’ に先立つ1953年に Larkin は短詩 ‘Days’ を書いている。発表されたのは ‘Church Going’ より後, 第3詩集 *The Whitsun Weddings* においてである。

What are days for?  
Days are where we live.  
They come, they wake us  
Time and time over.  
They are to be happy in:

(ll.1-5)

‘What are days for?’ の問いかけは ‘Church Going’ のなかで, serious でありたい, もっと serious でありたいと思いつめていく詩人の根底にあるものである。人生はなんのためにあるのか。日々の営みはなんのためにあるのか。一日一日をわたしたちは生きていくが, その日々は happy であるはずのものなのだ。人生はそれを生きる人にとって happy なものでなければならぬのだ。この第1連は ‘Where can we live but days?’ と現実の日々の営み以上のものを求めようとする1行で締めくくられる。

続く第2連のイメージは, 読む者をして現代に中世を見ている気にさせる。

Ah, solving that question  
Brings the priest and the doctor  
In their long coats  
Running over the fields.

(ll.7-10)

真摯に真摯に人生を問いかけていくと見えてくるのは僧と医者姿である。長いコートを翻して, 草原を, 畑を駆けてくる。となれば, これは中世のペスト大流行の時のヨーロッパのイメージではないか。草原にんでいたクマネズミがヨーロッパに持ち込んだというペストの大流行によ

り、誰もが迫り来る死に正面から立ち向かうことを余儀なくされた。僧も医者も職業としてではなく自らの危機として死に立ち向かわざるを得なかった。祈りも医術も役に立たず、死神に追われて駆けた12, 3世紀の僧と医者であった。人生の現実の日々を生き、真に happy な日々を模索するとき、さらに真摯に生を問いつめていくとき、人はやはり死を見つめていかなければならないのだ。‘Memento Mori’ 中世のあの標語は、現代の今もなお、真に生きるために最も力になるものなのかもしれない。しかし、死を思いつつ、日々を真摯に生き、問いつめていくとはどういうことなのか。Larkin の詩作は決して抽象的なものに終わってはいない。

‘Days’, ‘Church Going’ より少し後、1955年に書かれ、*The Whitsun Weddings* に発表された一編 ‘Mr Bleany’ の最後の2連である。

But if he stood and watched the frigid wind  
Tousling the clouds, lay on the fusty bed  
Telling himself that this was home, and grinned,  
And shivered, without shaking off the dread

That how we live measures our own nature,  
And at his age having no more to show  
Than one hired box should make him pretty sure  
He warranted no better, I don't know.

(ll. 21-28)

Mr. Bleany はごく普通のイギリス庶民である。車体工場で誠実に働き、周りの人と心やさしく触れあい、ときに友人や姉妹とのひとときを楽しみながら、大方は孤独に暮していた。

‘This was Mr Bleany's room. He stayed  
The whole time he was at the Bodies, till  
They moved him.’

(ll. 1-3)

貧しいアパートに暮らし、人知られず息をひきとって、ひっそりと墓場に送られた Mr Bleany にとっても、どう生きるかが大切だったのだ。自分がどう生きたかを知り、自分の本性を認識することはこの上もなく怖いことだが、Mr Bleany がそれを心に感じていたかどうかは分からない、というけれど、彼にとってもそれが大切であることは確かで、意識の上にはのぼるかどうかは別にして、全ての人々の心の底にそれはあるのだと言う。<sup>4)</sup> Larkin には、この1955年の作品の

## 戦後イギリスのアンビヴァレンス

ようにイギリスのある町の片隅の名もない人間にスポットを当てたような詩がいくつもある。Larkinが「地方性の詩人」といわれるゆえんである。が、単に一地方の一人の人生というだけでなく、そこに彼ののっぴきならない自己存在への問いかけがある、といえないであろうか。

さて、自己存在、人生のあり方を一つの角度から眺めた作品をもう一編読んでみよう。‘The Whitsun Weddings’は1958年に書かれ、同名の詩集に収められたLarkinの代表作であるが、‘Church Going’に見られる意味の重層性が、形を変えてここにも見られる。

Whitsundayは復活祭の後の第7日曜日で、5月中旬から6月上旬にかけての日曜日になる。この頃のイギリスはとても美しく、この休暇に結婚式を挙げる人が非常に多いという。June brideというのもこの頃の花嫁をいう。この美しいWhitsundayの前日、詩人はLondonに向かう列車に乗った。そこで幾組かの新婚カップルと乗り合わせることになる。この詩は大変のどかな調子で始まる。

That Whitsun, I was late getting away:  
Not till about  
One-twenty on the sunlit Saturday  
Did my three-quarters-empty train pull out,  
All windows down, all cushions hot, all sense  
Of being in a hurry gone.

(ll.1-6)

お客もまばらで、誰一人急ぐ様子もなく、ゆっくりと動き始める。この詩も‘all sense / Of being in a hurry gone’であるかのように、ゆっくりと始まる。通る道筋は、人が生を営むイギリスの社会である。戦後10年余りのイギリスは魚の臭いもする昔ながらのイギリスでありながら、通りにはフロントガラスをきらめかせて自動車走り抜けるといった重層性が見られる土地であった。車のフロントガラスをきらめかせたのと同じ光が、Humber川の川面にも反射してきらめく。広い農場と工場が隣接して並び、農場の間を流れる運河には工場の排水が流れ、ぶくぶくと泡を立てる。草の匂いと自動車解体工場の革の臭いとが立ち混じる。そして向かう町は、新しいが、なんの特色もない町である。1連半も費やして、ゆっくりゆっくり、狭い町並みから川畔を通り、広く開けた土地を走る列車の様を描いていく。そこには、昔ながらのどかな農村イギリスと新しく開けた工業化されたイギリスとが混在する。2連の間、詩人とともに、読者も、列車の窓からの風景に目を奪われている。辺り一面‘acres of dismantled cars’となったところで(1.20)、初めて、列車の止まる駅での喧噪に気づくのである。解体され、車としての装備をバラバラにされた車は、当時のイギリスの姿であるのかもしれない。それまでのイギリスとしての特色をはぎ取られて(dismantled)、簡単にことばで形容できなくなった(nondescript)イギリス

の姿なのかもしれない。列車の向かう新しい町が、実は、*dismantled* な村を通り抜けて到着する *nondescript* な町だという否定的なことばで表現されるのは、今乗り合わせている人たちの向かう先が、自分らしさをはぎ取られ、なんの特色もなく、名もない自分たちになっていくことを暗示しているようで怖い。それはまた、戦後のイギリスという列車が向かっていく次の世界なのかもしれない。

第3連で駅に止まったとき、新婚のカップルを見送る人たちがいた。詩人はそれと気づかなかったが。

We passed them, grinning and pomaded, girls  
In parodies of fashion, heels and veils,  
All posed irresolutely, watching us go,

As if out on the end of an event  
Waving goodbye  
To something that survived it.

(ll.28-33)

結婚式に出た人たちはめかしているつもりでも、それは下手くそな模倣でしかなく、見送っているふりをしているにすぎない。結婚した二人の姿に、結婚によって失うもの、生きてゆくことによって失うものの多さを想い、後に残されているわずかのものをいとおしんでいるように見える。

第4連で、はっと我に返った詩人は、もう一度あらためて、意識的に、この見送りの人たちに目をやる。

Struck, I leant  
More promptly out next time, more curiously,  
And saw it all again in different terms:

(ll.33-35)

‘struck’ という短い一語で新しい視点が開けるのである。どの父親も、似合わない礼服を着、生活の歴史を額に刻んでいる。母親たちはというと、太って品もなく、なんの感傷もなく大声でしゃべっている。叔父たちも大声でみだらな話しをする。娘たちはめいっばい着飾って衣装がプラットホームにいるようである。‘Marked off … from the rest’ (l.41) とは娘たちの衣装が人々のなかで目立っているということである、と同時に、結婚式というものが人々の生活からかけ離れていることをも示しているようだ。



戦後イギリスのアンビヴァレンス

新婚のカップルが乗り込み、列車の内と外とに彼らと見送りの人たちが分けられ列車が動き出すと、新たな視点が生じる。

And, as we moved, each face seemed to define  
Just what it saw departing:

(ll.48-49)

子どもたちは退屈さを、父親たちは恥ずかしくない式を終えた満足感と、百も承知の式のばかばかしさへの虚しさを、母親たちは自分たちにとってもそうであったように、一見幸せな結婚式が人生の終焉であることを思う寂しさを、そして娘たちは宗教に正当化された初夜の暴行への好奇心をそれぞれ露にする。結婚式というものは、それが Whitsunday であれいつであれ、つまりはそういうものなのだ。

Free at last,  
And loaded with the sum of all they saw,  
We hurried towards London, shuffling gouts of steam.

(ll.55-57)

幸せなはずのカップルを乗せた列車は通風に痛む足を引きずるかのようになり、終着駅 London へと走る。式を終えた二人が向かうのは人生の終着駅であり、その足どりは痛む。ひた走りに走る列車が、通風の痛みを吐き出しつつ走るのには、乗る者たちの旅の足取りが痛むからなのだ。彼らがそれを自覚しているかどうかは別にして。London に向かう列車が走り抜ける野原は、今や、区画整理され、幹線道路が走る。映画館があり、工場の冷却塔がある。London は ‘Its postal districts packed like squares of wheat’ (l.70) である。

10余りのカップルが乗り込んだようであり、彼らは二人ずつ並んで坐っている。

and none  
Thought of the others they would never meet  
Or how thier lives would all contain this hour.

(ll.66-68)

この時を二人が人生の伴侶として共有することなど思ったこともなかったであろうし、まして、別の個として生まれた彼らが、こうしてここにいることなど思いもしなかったであろう。列車に乗っている誰もがそうなのだ。会ったこともない人のことなど誰も考えもしないが、しかし、見も知らない人が、自分の人生で大きな意味を持っていることだってある。そういう人が、今、こ

の列車の旅を共有しているかも知れない。人生は、そして、人と人とのつながりはそういうものなのに、誰もそんなことなど思いもしない。結婚式という茶番を演じたものだけが、二人が時を共有していると錯覚している。小麦畑には番号などなかったのに、それでもなんの混乱もなかったのに、今は全ての土地が郵便番号で管理されている。そんな土地を詩人たちは目指した。若いカップルたちも喜んでそこを目指しているのだ。

長い列車の旅は最終連で終わる。たまたま乗り合わせた乗客もそれぞれの生活に散っていく。

and it was nearly done, this frail  
Travelling coincidence; and what it held  
Stood ready to be loosed with all the power  
That being changed can give.

(ll.74-77)

今まで一つの列車に乗っているということで、安定していた人々の関係が解き放たれ、それぞれに変わっていかうとしている。それは力である。

We slowed again,  
And as the tightened brakes took hold, there swelled  
A sense of falling, like an arrow-shower  
Sent out of sight, somewhere becoming rain.

(ll.77-80)

ブレーキがかかり、列車が止まる。‘the tightened brakes took hold’ではいかにも引き締まって列車が止まり、一旦、詩が凝縮して止まる。列車の旅という一つの時間の流れのなかで、2度3度、視点を変えて眺めなおし、結婚の華やかさと非日常性、虚しさを、人生のなかでの愛と結婚と人との出会いの意味を問いなおす。生涯一人で過ごした Larkin にとって人と人との愛は serious になればなるほどその本質を見極めることは難しかったのではないだろうか。

‘The Whitsun Weddings’は視点の転換によって意味を重層的に重ねて、列車の動きとともに、人生の一つの切り口を見つめている。生きるということの本質はなかなか見えてこない。長い旅の果てにようやく見えるのは‘A sense of falling’である。ガタンと止まったときのつんのめる感覚。‘fall’はまた、気分が落ち込み、生のテンションが落ち込む感覚、人としての墮落の感覚、結婚式で昂揚していた気分の沈潜の感覚、そして「矢の雨」の落ちてくる感覚。列車が止まり、ガクンとなった途端に、今までのカンカン照りの暑さにお湿りを与えるように降る雨ではあるが、この雨は矢の雨である。「大地に降り注ぎ、新たな命をはぐくむ雨」<sup>5)</sup>「キューピッドの愛の矢」<sup>6)</sup>といった解釈もあるが、むしろ人を傷つける矢のように筆者には思える。それぞ

れの生活に入っていく人々は、その第1歩に矢の雨の洗礼を受ける。‘somewhere becoming rain’ と、なんだかほっとするような文ではあるが、その rain は人により、場面により、また同じ rain も時がたつにつれその意味が変わる。

批評家たちが、詩集 *The Whitsun Weddings* を ‘a sad even bitterly cynical book’ と評したことに対して、Larkin 自身はそれを否定し、‘The Whitsun Weddings’ も決して ‘a sad poem’ ではないと言い切っている。

You can't say ‘The Whitsun Weddings’, which is central to the book, is a sad poem. It was just the transcription of a very happy afternoon. I didn't change a thing, it was just there to be written down. … There's nothing to suggest that their lives won't be happy, surely? I defy you to find it.’<sup>7)</sup>

詩人が言うとおりに、この詩は実にゆったりとした、happy な雰囲気のある詩である。‘Days’ に歌われたように、人生は happy であるはずのものである。‘Mr Bleany’ でみたように、一見幸せな生に人は身を委ねることもできる。しかし、そこにおいても、やはり、人の生の意味は問われているのだ。Larkin は静かにそれを問い返し、その捉え難さを感じていたように思われる。

世界を制覇し、その勢力を拡大し続けていったイギリスも第2次世界大戦では大きなダメージを受けた。民族独立運動のなかで、どんどん植民地が独立し、戦前の大英帝国ではなくなっていた。一方、資本主義が発達し、人々の生活が安定していくなかで、個々の人間の存在の意味は個のなかでしか考えられなくなっていた。イギリスという国も人も個として存在するようになり、ひとつの言葉では定義できなくなっていた。そんな社会の中で、Larkin は人としての生を、むしろ抑えたトーンで問い、歌った。おのずと、その詩の語るものは重層的になる。一つの生も角度を変えれば、様々な意味を持つ。それを彼は言葉の意味の重層性と構造の重層性で表現したのである。Larkin の内面のアンビヴァレンスはそのまま戦後イギリスのアンビヴァレンスであった。

## 註

- 1) 京大英文学会 1990年年次大会「臍まがりな詩—ラーキン追慕」にて
- 2) Anthony Thwaite (ed.), *Philip Larkin: Collected Poems*  
本稿中の Larkin の詩の引用はすべてこのテキストによる。
- 3) Kaite Wales, “Teach Yourself ‘rhetoric’: an analysis of Philip Larkin’s ‘Church Going’”  
(Peter Verdonk (ed.), *Twentieth-Century Poetry*, p.92)
- 4) John Haffenden, “The True and the Beautiful” (*London Magazine* April/May, 1980)
- 5) John Seland (ed.), *An Essential History of English Literature*, p.157
- 6) 宮内弘「光と影—ラーキンの列車の旅の詩」(『英文學評論』第 LXVI 集) p.50  
「キューピッドの愛の矢」であると同時に「人を傷つける矢」と解釈している。
- 7) Haffenden, *Op.Cit.*

参考文献

- Thwaite, Anthony (ed.). *Philip Larkin: Collected Poems*. The Marvell Press: London, 1988
- Larkin, Philip. *Required Writing, Miscellaneous Pieces 1985–1982*. Faber and Faber: London, 1983
- Thwaite, Anthony (ed.). *Selected Letters of Philip Larkin 1940–1985*. Faber and Faber: London, 1992
- Verdonk, Peter (ed.). *Twentieth-Century Poetry: from text to context*. Routledge: London, 1993
- 小山驥 & 川村和夫(編). *Twentieth-Century American and English Poetry*. 南雲堂: 東京, 1982
- Banerjee, A. (selected). *Modern English Poetry: A Selection*. 開文社: 東京, 1982
- Silkin, John (selected). *An Anthology of Twentieth Century English Poetry*. 研究社: 東京, 1993
- Hughes, George. *Contemporary British Poetry*. 英宝社: 東京, 1989
- 本田錦一郎 他(編). *Phases of English Poetry—from Shakespeare to Larkin*. 篠崎書林: 東京, 1983
- Haffenden, John. “The True and the Beautiful: a conversation with Philip Larkin.” *London Magazine*. April/May, 1988
- 宮内弘「光と影—ラーキンの列車の旅の詩」(『英文學評論』第LXVI集. 京都大学総合人間学部英語部会; 京都, 1993)
- Seland, John. *An Essential History of English Literature*. 南雲堂: 東京, 1994
- 村岡健次・木畑洋一(編)『イギリス史3』(世界歴史体系) 山川出版; 東京, 1991
- トレヴェリアン, G. M. (大野真弓(監訳))『イギリス史3』みすず書房; 東京, 1975

(1994年8月11日受理)

(おかむら まきこ 女子短期大学部教授)